
ホントはね

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホントはね

【Nコード】

N3828N

【作者名】

潤

【あらすじ】

中学生の山田遼太郎は大野とメールをしていた。そしてとある噂を耳にする。そのことで知らないアドレスからメールがくる。その人物と中3同じクラスになる。修学旅行やら卒業式など学校生活の定番行事も出てきます。

噂

俺は山田遼太郎。

中学生だ。

気のあうわけでもないが

よくメールのする女子ー大野ーと

今現在メール中だ。

「電話に変えへん？」

「お前がかけてくれるのならな」

「ぶー、ケチ。

でも、まいつか」

ブルルー。

ホントに電話しやがった。

「でさー広めてほしいねんけどさー」

「何をだ？」

「いやー石川が夏海のすか、

すか、すか、すか、」

「桜井のすかつてなんだ？」

「いやー石川が夏海のスカート覗いたらしいよー」

「で、それを広めると？」

「そ」

「くだらん。

そんな…でも石川ならしそーだな」

「そーなん？」

「ああ」

「じゃ、用すんだから電話切るね」

ツーツー。

出会い

ピロリン。

俺に知らないアドレスからメールが来た。

「石川が夏海のスカート覗いた」

俺は無視を決め込むつもりだった。

数分後。

また同じアドレスからメールが来た。

「石川に聞いたやろー？」

夏海のパンツ何色でどんなやつたか？

この変態」

誰だよ、つーか変態って。

俺は思わずメールを返した。

「俺は変態じゃねえし聞いてねえ。

つーかお前誰？」

「ウチは山本やでー」

「ありきたりだな。

下の名前は？」

「悠里」

「山本悠里か。

同じ中学のやつだよな？」

「まあねー。

アンタのこともある程度知ってる」

「知ってるって？」

「小学校が同じとかー

毎日のように彩にメールしてるのとかー」

「小学校が同じ？それは初耳だな。

それは大野が毎日送ってくるからだ」

「そーかい」

これが俺と山本の出会いであつた。

中3

そんなことがあったのも忘れそうになり
進級して中3。

なんとまー奇遇なことに

山本と俺は同じクラスになった。

そんなある日。

「あー変態ー」

山本のこの一言で俺はあの一件を
思い出した。

「お前か、山本悠里」

（あ、意外とかわいいかも）
はーいHR始めるぞー。

先生が言い出した。

が、そんなことにもはた気付かず
話し続けた。

「おうよ」

「で、何か用？」

俺は率直に聞いた。

「いや用っていうわけじゃないけどー

彩に変なことせんよう見張つとかんといかんああって思って
「安心しろ。」

大野には手はださねえよ」

「男のそういうセリフたいてい信用できんよー」

「じゃ、どーしたら信じてもらえるわけ？」

「んー手出したら腹切ってもらうとかー？」

「えらいえげつない事させるな」

「あ、先生来てるで」

それでー今日の掃除は

山本と山田に任せていいか？

「なんでですか？」

2人声をそろえた。

「お前らなあさつきまでずっと

話してたやないか、その罰だ」

「はい」

掃除

掃除中。

サツサツサ。

「ぶー。なんでアンタと2人で掃除せなあかんのよー」

「そもそも山本が話し掛けるから悪いんだ」

「にゃにおう」

で、石川から聞いたの？」

「あー去年の話か。」

それは聞いてねえ。

興味ねえし」

「そーかー」

「そういうお前は俺以外の人間に言ったのかよ？」

「言つてないよー」

サツサツサ。

ガラガラ。

「そーいやさ山本は彼氏とかおるの？」

ガラッ。

「何でいまそんなこと聞くのよ？」

「いやー無音空間って俺嫌いでさー」

なんか話題ないかなって思つてね」

よつと。

山本が運んでいた机の上に座った。

「今はね、昼だけど夜になれば」

星はたくさん出てくる。

流れてるホントに見たい星はなかなかみつからない。

人も同じ。

人はいっぱいいるけど

ホントに見つけない人はなかなかいない」

「ハア？」

「さあてつとこれが彼氏いるかどうかの答え」
机を元にもどす作業に山本がしだした。

「もう少し簡単にしてもらえんか？」

「ホントバカだね、人間」

「おーい、自分の世界に行くんじゃない」

「でもそれだから面白いんだよ、人間は」

「だからー」

「見つけたんだ。ウチは。」

ほんとに見つけたい星を」

「おーい」

「ん？なんか言った？

彼氏ならいないよー」

「ならそうとつといわんか」

「え、ウチなんか言ってた？」

「なんか星がどーたらこーたら…」

「いやー失言かも、

アハ。気にしないで」

「気になるっーの」

そんなこともあった。

正直今思えばこの頃から

俺は山本を気にしだしていたのかもしれない。

修学旅行

そして時は経ち

夏にある修学旅行。

ある日の夜。

花火で盛り上がっていた周り。

俺と山本はあまり盛り上がれずにいた。

……。

「彩も来てればよかったのにね」

「ああ」

そう大野は家庭の事情ってやつで
修学旅行には来ていなかった。

「ほのかちゃんバリかわいいよな」

「大野の妹の話か？」

「それもそーだけど、

クラスメートの方のほのか」

「松本 ほのかか。」

「そーかあ？」

とかいいつつ実は俺は気にしているのだ。
単刀直入に言うとか好きなのだ。

「あー何？私の事呼んだ？」

松本がやってきた。

「あー」

「いやちよつと話題にしただけ。」

彩の妹といいほのかといい

ほのかってつく子はなんでかわいいんだろってね」

「そーかな？」

私なんかかわいくないよー。

あー遼太郎もいたのかー。

お二人さん仲いいねえ。

こんなときに2人きりなんて」

「いや、別に少し大野のことで話してただけだ」
そういったのは俺だ。

「彩、結局こなかったねー」

「知ってたのか？」

「まー修学旅行近づくことに
毎日行くや行かないだのあんなに騒いだら
誰だってわかるよ。」

ほら、彩のことは後にしてーほら」

そっつい松本は俺に花火を渡してきた。

「別にいいよ、俺は」

よしよ。

「一緒にいていいかな？」

「別に俺はいいけど、

山本が許すかどうかはしらねーぞ」

「いいよね、ここにいても？悠里」

「うん」

「じゃ、1個聞いていい？」

松本から俺に話し掛けてきた。

「悠里とは付きあってるの？」

それと彩は何で来てないの？」

「付き合ってたねえよ。」

それに1個だけだったはずだ」

「彩はねー家庭の事情がややこしいのよ」
もう一個の松本の質問には山本が答えた。
「ほうー」。

家庭の事情かあ。

私らでなんかできないかなあ？」

「できねえーよ」

俺は答えた。

「なんで？」

友達ならもう少し考えることができるでしょ？」

「あーあれだ、

家庭の事情には深く首を突っ込まない方がいい……」

「なんで？」

「大野の家は離婚寸前なのに

子供がまだ小さいのがいるからだ、
来れないんだ。

ま、学校サイドにはどー言ってるかは知らないけどな」

「そっかー。」

そりゃ私達にはなににもできないよねー。

で終わらせちゃいけない気がする……」

「何もできねえよ」

「夫婦の仲なら……」

「バカ。」

2人とも。

声がでかい。

これはウチらしくしないんだ」

そうして修学旅行は終わった。

大野へは松本、山本、俺で3人一緒にお土産を買った。

修学旅行後

「おー頼んだ写真もバッチシ」

俺が修学旅行中に頼まれてたこと。

大野が行かない代わりに

行った先の名所やらを写真におさめてくると、

俺の男の友人の相葉を写真に撮ることだ。

大野は相葉が好きなのだ。

「ん？なーんで大野が俺の写った写真を持ってるんだ？」

「え、あ、それは…」

相葉が気付いてしまった。

ここはテキストに話題を変えねば…。

「なー相葉、大野に渡したいもんがあるんじゃないかなかったけ？」

「んー？ああー。」

ほら、これ」

「何、これ？」

「修学旅行のお土産だ。

俺から大野にだ」

（ふう、写真はごまかせた）

「じゃーなー

じゃないや、山田おまえに用がある」

「なんだ？ここでは言えんのか？」

「いや、言えるが…」

女子のいる目の前じゃちょっといや

お前より女子のがいいか。

大野、好きだか好きですって言われるの

どっちのが女子として嬉しい？」

「え、あ、どっちも一緒くらい嬉しい…」

「そうかーよし」

「よしじゃねえ。」

お前俺に用ってのは？」

「山本さんに告白するのにどっちのほうがいいかと思って…」

「そうか。」

お前女子には聞くな」

「へーい」

大野はへこみ

そして山本は相葉からの告白を振った。

内心俺はほっとした。

同時に大野に対してもなにか同情心みたいなのが出てきた。
そんなこともあった。

卒業式

そして卒業式。

そして、涙の別れ。

カメラ屋のおっちゃんー二宮ーが俺に写真撮らせてくれと
いつてつきた。

「おーい、山本に松本ー

一緒に写つてくれー」

「えーいいよー」

バシャ。

このとき撮った写真は卒業アルバムに
載った。

そして俺は…。

「松本、大事な話がある…」

「んー何？」

「好きなんです」

「え…」

「松本が好きなんだあー……………」
つい俺は叫んだ。

周りが一瞬どころか俺の次の言葉を待っている。

「付き合ってほしい」

ひゅーひゅー。

などと口笛を吹いている面子もいる。

「ごめん。」

進路別々だから…」

「そっか。わかった」

今、現在

そして高校生。

1年の夏休み。

俺は山本と会う機会が来た。

それまでメールやら電話やらで

会話をしていたので、

山本に好意を抱きつつあった。

そんなある日会うことになった。

近くのファーストフード店で待ち合わせた。

そこで俺はいった。

「俺、今山本が好きだ」

「そかー」

「付き合ってほしい」

「ほのかに振られてウチに告白するまで2シーズン」

「おう」

「ごめん、理由はほのかのときと同じ

ホントはね、中学時代アンタが好きだったんよ」

「進路が別々だからか…

ありがとう」

そーいえばこんなこともあったなと

中学の卒業アルバムを見て

俺は懐かしんでいた。

社会人1年目の休みのある日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828n/>

ホントはね

2010年12月14日14時24分発行